

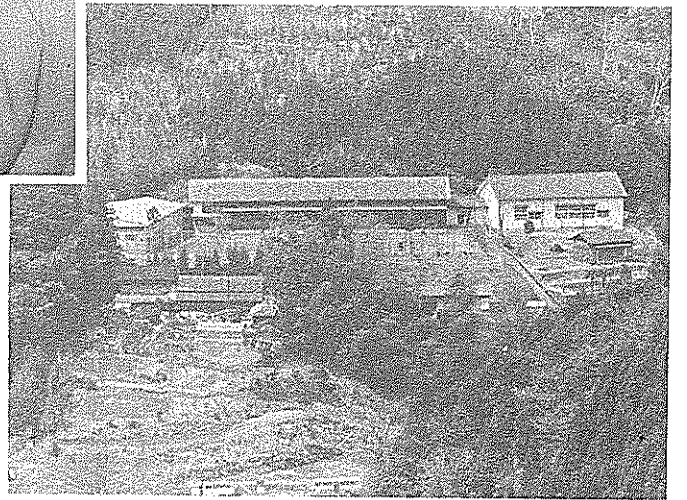
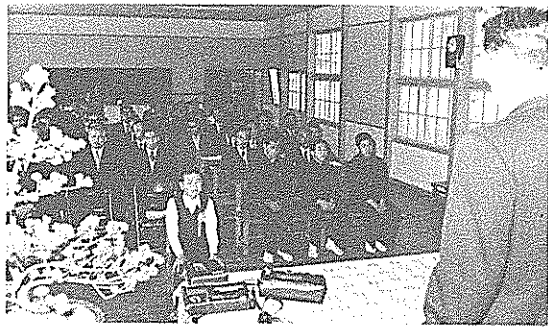
過疎化の
黒滝小

校史86年にピリオド たった一人の卒業式

押しよせる過疎化の波により、明治以来八十六年の伝統を持つ黒滝小学校（小笠原巧校長）が、三月二十五日閉校となりました。この日は、市の北部にある黒滝小学校で、たった一人の児童吉村義文君の卒業式と閉校式が同時に行われました。これには、地元住民三十余名と、小笠原校長、担任の東川元伊教諭と用務員の吉川美津さんらの他に、小笠原市長、門

田教育長、徳橋副議長、島崎市議会教育民生委員長、市内小中学校長ら市の関係者多数、報道関係者が参加、ふだんは訪ずれる人の少ない黒滝の地に多勢の人々が集まり、別れを惜しまれました。卒業式は、午前十時半から講堂で行われ、長い間なじみ歌い続けられてきた「もゆる緑におおわれ」流れも消き黒滝の……で始まる校歌の斉唱から行われました。

まず、歴代三十一人目に当る小笠原校長が、黒滝小学校最後の卒業生吉村義文君に六百七十六人目にあたる卒業証書をわたした後、卒業の祝辞を述べました。小笠原校長は、吉村君は、五年生、六年生と一人ぼっちになり担任の先生と一対一の授業をしたが、いやとかつらいとか言うことは決して言わず、一日も休まずよく勉強しました。これからは一人



老人1人に対する働き手の数（52年）8.1人。

で頑張つて勉強したことを心において、また、はげましてくれた周囲の人々の暖かい気持ちを忘れてはいけません。中学校では、君の力をためてほしいと思います。と、感慨無量で吉村君に別れのあいさつをしました。これに添えて吉村君は、「みんながこの卒業式を祝ってくれて、

ありがとうございます。この感激は忘れることができません。小学校の新生活の時は僕一人でした。友人がたくさんいたのでもさみしくありませんでした。しかし、今日限りであるのかと思うとき、今日の悔いはありません。これから立派な中学生になるよう頑張りたいと思います。お世話になったみなさん、黒滝小学校、さようなら」と、別れの言葉を元気づけたい述べました。

この卒業式には、ちょうど二年前、吉村君がたった一人で見送った三人の卒業生、西村龍二君、中山勇一君、谷口修二君が北陵中二年生となつてお祝いにつけ、使わないということであった。何とスマートな発想であることよ。廊下を歩きながら説明を続けてくれる。すばらしい建物である。清潔なことは、モスコイ以来今まで入ったどの建物よりもすぐれている。床の色、壁の色、天井の色、暗い色は一つも用いていない。周辺の建物に気を配つてあるのと同じような配慮がなされている。

よき先輩、友人として吉村君の卒業式を祝福していました。この卒業式に引き続き閉校式に移り、厳粛な中で無事式展を終りました。式展が終了した後は、地元の人々と市の関係者で別れの宴を開き、歴史ある黒滝小学校の終わりをいつまでも惜しんでいました。

二月一日号六ページ「魚さし」にピリオド、の記事中「三」の疑惑については解明されておらず、は誤りで、「三」の疑惑うち、機種決定のいきさつについては、十分解明されておらず」とおわびして訂正します。

欧州行政視察を終えて⑧

市長 小笠原 喜郎

美人と老人「ストツツホルム」老人ホームと自動じんあい集中機組設置と二班に別れて見学する。バスで十分ほど走ると小高い丘の上にアパート群が見えだした。建物の壁の色がそれぞれが違って、カラフルである。ガイドの日本婦人も主人がスエーデン人であるだけに、さもほこらしげに何となく嬉しそうに見える。広い駐車場で二手に分れて見学を始める。我々はもちろん老人施設に向う。丘の上の空気が澄みきっている。高く低く、遠く近く、林立したアパート群に囲まれて施設がある。ここは郊外の住宅地である。若い美しいヘルパーさんが玄関まで出迎えて来た。幼稚園から大きいのは中学の初等科とおぼしい子供達が三々五々出入りし

ているのはなぜだろう。出入り口は老人よりも子供の方が多く、ようにも思われる。ヘルパーさんはモスコイの大学生ガイドに似た知的で朗明なお嬢さんであった。今回の視察の大きな目的の一つであるので緊張してメモしようとしたが、予想外の説明や感心させられることが次々と語り続けられるので手帳をポケットに入れて聞くことにした。

この郊外に来る途中見かけたアパート群の外見は老人たちに暗い感じを与えないための壁の色であった。部屋の窓から周辺の散歩道から見渡すかきり一年中色とりどりの花の咲いているような景色にするための配慮であったことがわかった。それよりも恐れ入ったのはここでは「老人」という言葉を

ここで遊び、そしていつの間にか老人たちと子供たちが親しく、他人でありながら自分の孫のように可愛くなり童心にかえつて老人たちは楽しくなるし、子供たちは自分のおじいさんやおばあさんのような親しみを感して度々遊びに来るようになる。

人里離れたところに老人同志がお互の昔話をくり返している老人ホーム。子や孫や嫁も長生きするほど遠ざかり、成長した孫はそのうちに祖父母の愛情を冷たくあしらうようになって来る。この風景が自分の国に珍らしくないことを思い出して、この分の為政者に頭が下がるおもしろがしてくる。先ほど玄関を少し入ったところで体格のよい老婦夫が一人の小学生とつ向き加減に楽しそうに語りかけていたのも何の縁せき関係もない二人であったかもしれない。このホームにも階級はある。毎月六万円ほどの炊事の出来る夫婦な顔になった。